N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414
Lincoln NE 68506 USA
www.nsdapao.org

#1143 09.02.2025 (136)

悪の天才の教育

ゲルハルト・ラウク著

パート9

第四章

「エキスパート

何年もかけて、私は自分の専門分野でいわば*権威として認められるようになった*。政府、半官半民の組織、民間企業が私を探し求めた。彼らの経費で私がヨーロッパに飛んだことも何度かあった。これは通常、私を証人として、あるいはインタビューに応じさせるためだった。

経費は別として、*プロボナとして*彼らの手助けができたことをうれしく思う。

一方、*営利*団体から高額な報酬を得ることもあった！私はその報酬を非営利団体に寄付していた。

外国政府が公式出版物や内部文書の両方で、私の仕事の意義を認めることは珍しいことではなかった。

私の個人的な書庫には、3人の*閣僚*、*大統領執務室*、*FBIとCIAの長官を*含む政府高官の署名入りの手紙が何通かある！

ドイツに降り立ったヨーロッパの政府高官とFBIのフリー長官との会談で、私が〝主要な話題〟になったと知らされたことがある。どうやら彼はすっかり驚いたらしい。私のことなど聞いたこともなかったのだ。というのも、私の仕事のほとんどはヨーロッパでのものだったからだ。

複数の分野、複数の国での連動した経験は、私の分析的思考と相まって、*同じ分野の専門家*でさえも他の人が見落としたものを、しばしば見抜くことを可能にした！

ある驚いた専門家が私に言った：*あなたが最初に言ったとき、私は信じなかった。でも、あなたは正しかった！どうしてわかったんですか？*

この言葉に驚きはしなかった。過去に何度も聞いたことがあったからだ。

いずれにせよ、〝専門家〟としての仕事は、私に多くの楽しい思い出を与えてくれた。

またある時、ドイツの裁判所で証言した元政治警察（*Verfassungsschutz*）捜査官が、私の仕事について非常に尊敬の念を込めて語った。敵対する立場からのこの言葉は、明らかにファンからの言葉以上の意味があった。この評価は新聞にも掲載された。

暗殺未遂

私の仕事は時に危険だった！

小包爆弾が実際に私の部屋に届いたことがある。私はすでにそれを手にしていた。その時、私は異変を感じ、警察に通報した。爆弾の専門家が、もし爆発していたら間違いなく私は死んでいただろうと報告してくれた！

私が経験した爆弾攻撃はこれだけではなかったが、私の人生を最も終わりに近づけた攻撃だった。

とはいえ、私は暗殺未遂を最も誠実な種類の賛辞と見なしたい。

テロ裁判における私の証言

ある*テロ裁判*での証言は特に印象深い。以下は1979年のビュッケブルクへの旅の話である。

飛行機が国際空港に到着したとき、私は記者たちの暴徒に襲われた。事前に*記者団には何も話さないよう*指示されていた。私は歯を食いしばり、一言も発しなかった。恒例の〝ノーコメント！〟さえも。

待合室でも報道陣に追い回され続けた。乗り継ぎ便に乗れば、すぐに彼らから逃れられると自分に言い聞かせた。

しかし、私は間違っていた！そのうちの半ダースは私と一緒に飛行機に乗った！

この飛行機が次の空港に着陸すると、滑走路をタキシングし始めた。しかし、ゲートに着く前に止まってしまった。私も含め、誰もが不思議に思った。そして思い当たった：これは*私と関係があるのだろ*うか？

ドアが開く音がした。スチュワーデスが来て、ついてくるように言った。私はタラップを下り、待機していた車両に乗せられた。この車は私を制限区域まで連れて行った。

到着すると、街頭服を着た3人の男に声をかけられた。彼らは警察官だと名乗った。

一人は私にこう告げた：*あなたに対する暗殺未遂が懸念されるため、警備を強化しています！*

その後、私たち4人は待機していた軍用ヘリコプターに乗り込み、離陸した。街の上空を飛んでいると、屋根の上で日光浴をしている女性たちが見えた。残念ながら、あまりに高すぎて、彼女たちが上半身裸かどうかはわからなかった。少なくとも私はヘリコプターに無料で乗れた。

私たちは人里離れた田舎道に降り立った。4台の車が私たちを待っていた。1台は私たち4人用で、残りの3台は追加のセキュリティだった。そして、私たちは道から外れた快適なホテルへと車を走らせた。この3人の警官は24時間体制で私と一緒にいてくれた。

夕食の食事、ワイン、会話はとても楽しかった。ある警察官は、彼の職業からすると少し奇妙に思えるジョークを言った。

優れたドイツ人が人生でやらなければならないことが4つある：本を書くこと、家を建てること、子供をもうけること、そして少なくとも一度は逮捕されることだ。

翌朝、私たちは極秘刑務所に車を走らせた。セキュリティ上の理由から、テロリストグループの裁判がここで行われていた。私はその裁判で証

言することになっていた。

法廷での出来事は印象深く、そう、ドラマチックですらあった。

これは戦後ドイツ史上最大のネオナチ・テロリスト裁判と　銘打たれていた。

仲間はみんなこのグラフィックを気に入っていた。相手チームは大嫌いだった。好みの違いで済まそうとせず、大騒ぎした。おや、そういう人もいるんだ！

テレビ塔が、特に嫌悪感を抱かせる番組の放送中に誤って倒れたのだ。この出来事のニュース報道には、この災難を画家が高度に様式化した描写が含まれていた。それは、私がこのゲーム番組への出演依頼を受ける少し*前に*発表された。

この場合、″or "と ″through "の違いは極めて重要だった。すなわち、*自由か革命か！革命による自由とは*対照的である！検察官」は動揺し、私の免責を無視して法廷で私を逮捕すると脅した。彼は深刻そうだった。

今回、私は*短いながらも重要な脇役としてゲスト出演*しただけだった。つまり、私は ″被告 ″ではなく ″弁護側証人 ″だったのだ。それにもかかわらず、私がこの特別な番組に参加することに同意する前に、政権は公式に私に一時的な逮捕免除を与えなければならなかった。

まず、″弁護人　″が私の免責が侵されるべきではない理由を説明するスピーチをした。

続いて ″被告 ″主席のミヒャエル・キューネンが同じ内容のスピーチを行った。

この有名な反体制派で私の親しい同志は、他の数人とともに裁判にかけられていた。裁判所は、彼が彼らの ″犯罪 ″に関与していないことを認めた。しかし、彼は有罪判決を受け、4年の実刑判決を受けた！彼は彼らのイデオロギー的信条を共有していたため、「知的扇動者」とみなされたのだ。これによって彼は刑事責任を問われることになったのだ。

彼らがそうしている間、私は自分なりの、必然的に非常に短いスピーチを心の中で準備した。すなわち、逮捕が命じられた直後に私が反抗的に叫ぶであろう言葉を。

しかし、″検事 ″は引き下がった。

彼の演技力を称えなければならない！彼は本当にしばらく私たちを楽しませてくれた。

いずれにせよ、その日の残りは無風だった。

出廷後、3人の友人がホテルの部屋で面会することを許された。

もちろん、部屋には盗聴器が仕掛けられていると思った。私たちは紙切れに書き、それを灰皿で燃やすことでコミュニケーションをとった。そうしている間、私たちは政治警察の悪口を散々言った。個人的なことではない。ただ、盗聴器のためにね。（彼らが去ると、警察は当惑と落胆の表情を浮かべた！）。

私の「エルサッツ・ムッティ」、つまり「母親代わり」のウルスラもその一人だった。彼女と夫のクルトは、ナショナリストの囚人支援組織で主導的な役割を果たしていた。三人目の訪問者は、キューネンがフランスに亡命していたときに助けてくれた若いフランス人活動家だった。（数年後、このフランス人は襲撃され、ひどい傷を負った）。

帰路、シカゴに立ち寄った私は、そこで運命的な出会いを果たした。

マスメディア

メディアの無能と偏向の評判はすぐにわかった。

当初、私は常に自分の意見を合理的かつ正確に説明しようと努めた。しかし、それはいつも無視された。

最後に、私は常に少なくとも1つは、突飛で血に飢えた引用を入れることに決めた。まるで、セックスがテーマではないのに、ハリウッドがとにかくセックスシーンにこだわる映画の、形だけのセックスシーンのようだ。

あるインタビューはとても歪んでいて、私の名前が出なければ、私のものだとはわからなかっただろう。

同僚によると、自分のインタビューが掲載された後、記者から謝罪の電話があったそうだ！*編集者は完全に書き直した！*

両親が私の家族の友人だった別の記者は、仕事を断った：*彼らの望むことは書かない.....私が書くようなことは載せてもらえない！*

まったく議論の余地のない分野でマスコミと接していた知人は、マスコミはそこでも多くの間違いを犯すと断言した。

ある記者は私の年老いた母の後をつけまわした！私は自宅の上司に電話した：*もし私の家族の住所が新聞に掲載されたら、恩を仇で返すぞ。その記者とその上司、上司の上司の住所を掲載しますよ」！*

その結果、私が見た中で最も悪質な記事のひとつとなった。しかし、そこには家族の住所は書かれていなかった。

もちろん、メディアは常に、明らかに敵対的で偏った情報源を ″信頼できる ″と言っていた。　しかし、これには利点もあった。数年後、私の裁判のひとつで、ドイツ政府の役人が同じ情報源を信頼できるとして紹介した。彼らの情報が大きく外れていたのは当然だ！敵であるはずの私たちは、至って無知ではあったが、偽情報の貴重なパイプ役だったのだ。神のご加護を！

次のようなシナリオを想像してみてほしい。あなたはユダヤ史の講義を受けることにした。教授が教室に入ってくる。ナチスの腕章をつけている。教授はあなたに、主要な教科書として『*我が闘争*』を購入するよう指示する。このコースは偏りがないと思いますか？

率直に言って、第三帝国に関する ″文献 ″のほとんどは、それに劣らず偏っている！あなたの見解がどうであれ、あなたは事実を知るに値する！客観的」な本が見つからなければ、両陣営の主観的な本を読もう。

いずれにせよ、敵対的な報道機関は一般的に、意図する被害者をとんでもない変人として、あるいは恐ろしい脅威として描く。後者の方が記者にとっては大きなネタになる。私たちにとってもその方が好都合だった。さらに、ドイツ政府の公式出版物は、親切にも私たちの意義を検証してくれた。

私たちの「メディア・キット」には、後にタブロイド紙全10紙と小冊子が同封された。*NSDAP/AO入門：戦いはひとつになる！*』と題されたこの小冊子には、主要メディアの引用、NSDAP/AOの年表、さまざまな記事が豊富に含まれていた。時にはビデオカセットも入れた。どんなにいい加減な記者でも、自分で面白い記事を書くのに十分な情報を引き出すことができた。（ドイツ語版もあった）。

すでに1970年代の初期から中期にかけて、私たちはメディアに取り上げられるようになった。この初期の報道には、リンカーンの地元紙の一面記事や、*オマハ・ワールド・ヘラルド紙*の日曜版付録の特集記事などがあった。古くからのロックウェル活動家である私の友人ジョージは、後者に参加した。

FBIがジョージに私を知っているかと尋ねると、彼はノーと答えた！FBIは親切にも私たちに連絡を取ってくれた。私たちは仲間になった。彼は私に多くの貴重な人脈を紹介してくれた！

私の海外出張の多くは、政府、政府系メディア、民間メディアから資金援助を受けていた。時には100ドル札の束を渡されることもあった。プロレスのようなものだった。敵意は演技の一部に過ぎなかった。

彼らが私の意見に同意したと言いたいわけではない。正反対だ！でもね、ビジネスはビジネスだ。メディアは売春婦だ。いい記事が欲しい。いい話は利益を意味する。銀貨30枚でイエスを売り払い、ユダと本や映画の契約を結ぶ。

もっと哀れだったのは、明らかに私たちへの嫌悪と危害を加えたいという願望を誠実に抱いていたジャーナリストたちだった。彼らも同じように簡単に騙されたが、彼らに利益はなく、我々にも害はなかった。まったく逆である：彼らの明らかに誠実な敵意は、偽情報の情報源としての信頼性を高めた。

いくつかのインタビューは特に面白かった。

私の1979年の*CBS*シックスティ・ミニッツでのラン・ラザーとのインタビュー

最初の質問はこうだった：*あなたは、ドイツのネオナチの地下組織に宣伝材料や資金、銃を供給する金持ちのゴッドファーザーと呼ばれていますね。それは本当ですか？*

彼の表情は真剣そのものだった。私は笑いをこらえるのに必死だった。（この質問が放送で使われたかどうかは覚えていない）。

このインタビューが1979年1月に放送されたとき、ネブラスカ州リンカーンにある私書箱6414番がクローズアップされた。その結果、何週間も毎日ダッフルバッグに入った郵便物が届いた。そのうちの90％以上は簡単な情報提供の依頼だった。残りはファン・メールとヘイト・メールに分かれていた. . . 1979年7月にこのインタビューが再び放送されたときには、最初のときよりもさらに多くのメールが届いた。

1992年*ABC*プライムタイムのクリス・ウォレスとのインタビュー

インタビューの一節はこうだ：

ウォレス*ヒトラーがそんなに偉大な人物なら、なぜ戦争に負けたのですか？*
ラウク*第一に、彼は多勢に無勢だった。第二に、彼は裏切られた。第三に、彼は人道的すぎた。*
ウォレス*ヒトラーは人道的すぎた？*
ラック：*そうだ。*
ウォレス*つまり、ヒトラーはあまりに人間的だったということですか？*
ラウク：*そう、アドルフ・ヒトラーは史上最高の男だった。しかし、彼はあまりにも人道的だった。我々は二度とその過ちを犯さないだろう。*

サイモン・ウィーゼンタール・センターは後にこの最後の部分を引用した。それは、資金集めの郵送用封筒の外側に印刷されていた。

真実は自由をもたらす！(真実は自由をもたらす)

このスウェーデンのドキュメンタリー映画は、私を大きく取り上げていた。ほとんど有料広告のようだった。サウンドトラックに使われた不吉な音楽が愉快だった。B級ギャング映画、あるいはホラー映画を彷彿とさせる。この映画は後に12カ国で放映された。

本書の巻末には、さらに多くの紙媒体の引用が掲載されている。

＊＊＊＊＊

言論の自由という概念に　唖然とした同じ政府が、それでも言論の自由を自分たちの利益のために利用しようとした。もちろん東側ではなく、むしろ西側である。我々に対してだ！
おそらく、欧米政府に圧力をかけ、われわれを〝取り締まる〝ことを期待したのだろう。もしそれが彼らの意図だったとすれば、大失敗である。
実際、彼らは自らの足を撃ったのだ！
彼らがメディアにリークした記事は、しばしば大きな宣伝効果をもたら

した。この無料広告は金に値するものだった。メディアが*喜んで共犯に*なろうが、*無意識の手先であろ*うが、違いはなかった。私はニュースの切り抜きで膨らんだスクラップブックを持っている。

私のお気に入りのひとつは、『*リーダーズ・ダイジェスト*』英国版に掲載された私のインタビューだ！とても面白かった。でも、お世辞だとも思った。

奇妙なことに、別の雑誌『*デア・シュピーゲル*』*は*、私の町の市長が私を〝模範的な市民〟と評したことを引用している。

悪の天才か、模範市民か？

NSDAP/AOは世界最大です

国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物

多くの言語の何百冊もの本

多くの言語の何百ものウェブサイト